

「家船」の研究史

山本 敏子

はじめに

今からちょうど 10 年ほど前に群馬県上野村の北沢溪流上流部に広がるシオジ原生林を訪ねた時のことである。緑のシャワーを全身に浴び、木漏れ日の差す心地よい溪流に沿って登山道を 2 時間余り歩いていくと、「こんなところに……？」と思うような奥地で「北沢分校跡地」なるものに遭遇し、目を見張ったことがある。日本列島の津々浦々にまで旧文部省の施策が浸透し、小学校教育が普及していたことへの驚きからではない。あと少しで手つかずのシオジ原生林に至るという山の最奥部にあって、溪流と山の斜面に阻まれたごく狭い平坦な土地に小学校の分教場を設ける必要に迫られるほどに、多くの炭焼きの家族が暮らし、子育てをしていた、という事実に対してである。このあたりは炭焼きの盛んな地域だったらしく、確かにシオジ原生林に向かう道中の所々に炭焼き窯の跡が残っていた。戦後のエネルギー革命以前、炭の生産地として栄えた北沢流域沿いには、炭焼きを生業とする人びとの集落が存在し、毎日大勢の子どもたちが登山道入口の三俣にあった分校に通っていたというが^①、そこにも通えない奥地の子どもたちのためにできたのが先の北沢分校であった。

日本列島に生きた人びとの歴史時間において長く山の文化の時代が存在したことに注目する富山和子によれば、文化の中心地が下流平野に下りきった

「人口三〇〇〇万人の江戸末期」でさえ、「日本列島の山々には木地屋の数が五、六万人」はいて、その他に「木樵^{きこり}」や「漆掻き^{うるし}」、「炭焼き」が暮らしていたという。「その山のにぎやかさに支えられて日本の森林が守られてきて、その水をいま、私たちは飲んでいる」のだと、富山は語る⁽²⁾。

山岳地帯が約7割を占める日本列島では、かつて多くの人びとが山の自然の恵みに支えられて生活し、都市民に水や木材、エネルギー等を供給してきた。同様に、四方を海に囲まれ、身近に河川の流れる日本列島にあって、海や川とともに生きた人びともまた少なからず存在し、私たちの社会生活にとって不可欠な大きな働きをしてきたに相違ない。しかし、1969（昭和44）年に『明治百年東京はしけ物語』を著した六郷（現在大田区）生まれの回漕業者馬場伊之助が、その執筆動機を次の如く述べたように⁽³⁾、水上を生活の場とした多様な船種・職種の人びとの歴史は長く顧みられずにきた。

これを書きのこしておく理由は、次のとおりのことからである。／一つは、われわれは学校で歴史学を教わったが、…そこにはまるっきり庶民の生活がない。…／二つは、…私は明治二十一年生れだから八十三才になって余命いくばくもなく、私の死と共に東京におけるはしけの、いわゆる民俗学は亡びてしまう、おそれがあるからである。／三つは、こうした民俗学の中で、とくに、船・船頭が歴史に顔を出し得ないのは、陸上と離れた生活環境と、船頭という職務が、あたかも庶民的存在からさえも別扱いにされていたのが主たる原因であると思う。…下層階級であるのみならず、更にその下級と見なされていたからだ。…／これはいかにも関係者として無念千万のことである。しかも彼等が乗っている船は、陸上において一世帯をはり得る多額の費用がかかったもので、更にこれに積込まれる貨物はその数倍にもものぼる巨額のものであって、いかに彼等の職務が重大であることがわかってもらえよう。／その四つは、かかる重大な職務についての船の存在が、四百年間の長い年月に、官民共にその様相が歴史は勿論、民俗的にも打ち捨ておかれたことに対し私

は憤慨に堪えないのである。

『明治百年東京はしけ物語』は、曾祖父・祖父・父・叔父その他一族 13 軒がみな六郷を根拠地に木材の運送に従事する船頭(1914 年頃に廃業・転業)だったという馬場が、東京各地の舢(はしけ)の世界で繰り広げられたエピソードを内部から描いたものだが、当時、大都市の港湾や河川では多くの水上労働者とその家族が舢船の船内に居住していた。大正末年の頃、彼らに対し、「水上生活者」というカテゴリーで把握する外部のまなごしが生まれ、以後、「社会的保護」や「教育」を要する存在として大がかりな調査が度々実施された。こうした時代背景のなかで着手されたのが、西日本の海域で広範囲に活躍していた「家船」漁民に関する研究である。研究者によって「漂海民」ないし「漂泊漁民」とも総称される人びとは、日本列島の「家船」のみならず、東南アジア各地の「オラン・ラウト」、中国における「蠻民」など、広くアジアの海域や大河川での存在が知られている。1960 年代に入って急速に姿を消していったが、日本では今なお、「家船」への関心は高く、さまざまな形で「家船」に言及する著作や論文、エッセイが発表されている。

本稿では、「水上の船・船頭のことから」と同じく、歴史上、ほとんど記述されることがなかったと言っても過言ではない「家船」に関する研究史を振り返り、「家船」の存在が文明の転換期に遭遇している今日の私たちに何を語りかけているのか、とりわけ人間の暮らしと子育ての習俗の視点から考える機会としたい(文末参考文献参照)。

1. 「家船」という用語

今日、一般に使われている「家船」は、「水上生活者」という用語が社会に浸透した昭和初期の頃に人文社会科学系の研究者のあいだで準学術的な用語として広まった言葉である。

そもそも「家船」とは、どのような存在なのだろうか。古くは中世の絵巻物『一遍聖絵』や『伊勢新名所歌合絵巻』に描かれており、「家船」は 13 世

紀頃までは遡ることができるという〔三原市役所 1979.9 : 313-314 頁〕。ただし、宮本常一がいち早く紹介し〔宮本 1960.1〕、伊藤亜人が過去の文献資料にあたって検証したように〔伊藤 1972.3〕、その姿を的確に描いた文献上の初見は、ポルトガル人のイエズス会宣教師であったルイス・フロイスがインド管区長サンドロ・バリニャノに宛てた 1586 (天正 14) 年 10 月 17 日付の書簡である〔村上訳・柳谷編 1969 : 141 頁〕。クリヨネが秀吉に謁見するために船で長崎を発ち、東上する途中で見聞した記録として、次のような一節が出てくる。

筑前の海岸に沿うて博多を過ぎ、諸島の間に出た時、これまでかつて見たことのないものを見た。我等の乗ってみた船の附近に六、七艘の小さい漁船があったが、この舟は漁夫の家となり、妻子・犬猫・食物・衣服及び履物その他、家財一切を載せ、各舟には唯一人船尾に坐って櫂を頭上に漕いでみたのである。

一行が下関に到着する前の話なので、宗像・大島・鐘岬沖であることは間違いないというのが伊藤の見解である。その頃、このあたりでは、「アマ」と呼ばれた鐘ガ崎（現福岡県宗像市の北端）の漁夫が一家で船に乗り込み、5～7 艘で船団を組んで遠く対馬や壱岐、時には朝鮮半島南岸の海域まで出かけて、それぞれの稼ぎ場で魚を網で獲ったり、鉾でイルカ・マグロを突いたり、もぐりでアワビを採ったりして、一年間の大半を海上で過ごしていた⁽⁴⁾。対馬に残っている 18 世紀初めの古文書には、鐘ガ崎のアマが「常住海上住居」、「船住ヒ」であったことに触れた記録が見られる〔羽原 1952 上 : 104-116 頁〕。鐘ガ崎（宗像）のアマであった可能性が極めて高い。

ただ、これらの記録に「家船」という用語が出てくるわけではない。「家船」の用語が確認できるのは、筑前国福岡藩出身の貝原益軒が 1699 (元禄 12) 年に著した『日本釈名』である。「蛭 (アマ)」の項に、「つねに船を家としてくが (陸) にすまぬもあり俗に家ふねと云、年おひてハ船の中を子にゆづりて隠居してへさきのかたにすむ」と記載されている⁽⁵⁾。

海上生活をする鐘ガ崎系統のアマが「家船」と呼ばれていたか否かは定かでないが、これとは別に九州西海岸に肥前国の瀬戸を親村とする船上生活漁民の一系統があり、「家船（エブネ）」という言葉は、「がんらいは長崎県西海岸地方だけに通用した方言」であった〔羽原 1963.11 : 102-103 頁〕。厳密に言うと、同じく「家船」の漢字を用いていても、瀬戸の枝村である平戸では「イエブネ」、五島では「エフネ」と呼ばれることが多く、旧大村藩地方では「エンブ」という蔑称もかつては公然と用いられていた〔伊藤 1972.3〕。幕末に肥前国彼杵郡大村地方（長崎県）を領有した大村藩で編纂された『大村郷村記』（1862 年完成）には、「瀬戸村 家船之事」として「家船」の用語が出てくる〔藤野編 1982.5 : 458-459 頁〕。

ところが、九州西海岸以外の海域にも船上生活漁民が見られながら、他の地方では「家船」という呼び方も、それにかわる適当な呼称もなく、「そこで研究者のあいだでは、現在、家船を、船を家とし、これに住み、土地をもたず、もっぱら漁獲物を食料と交換しながら、一定の海域を年中移動している夫婦単位別世帯の漁業者またはその集団と定義して、全国的に適用している」のだと、羽原又吉は述べている〔羽原 1963.11 : 102 頁〕。

ちなみに、同じ九州でも東海岸に位置する豊後国の津留集落（現大分県臼杵市）の船上生活漁民は「シャア」と呼ばれた。瀬戸内海の場合には、「船住まい」と総称されることが多く、「船所帯」、「ヤウチ船」、「メオト船」とも言われた。かつて豊田郡内にあった能地と二窓が船住まい漁民の本貫地であったことから「ノウジ」、「フタマド」、「トヨタノモノ」とも称されていたという〔可児 1994.12〕。これが、船上生活漁民の三つ目の系統である。

では、どのような経緯を経て、「家船」という長崎県西海岸地方の方言が、研究の便宜上の学術的な用語として広まり、市民権を得たのだろうか。

「家船」に早くから注目していたのは、柳田国男だった。1917（大正 6）年の中国旅行の際に珠江を「蜃民」の船で遡ったのがきっかけとなったようである〔谷川 2007.3 : 107-108 頁〕。柳田は 1919（大正 8）年 5 月 1 日～12

日に九州旅行をしているが、『定本柳田国男集』の年譜に「水上生活者に興味を持ち、各地で見聞。四日～六日、佐賀県東松浦郡呼子の漁村を見物。平戸島の田助にて家船の児童について話を聞く。八日、長崎県立図書館で旧記の中の家船のことを調べる。…十日、大分市でシャアの船を見」とあり⁽⁶⁾、「家船」の民俗調査を目的とする旅だった。1921（大正10）年には鹿児島・沖縄旅行の帰途、長崎を再訪し、1月23日に長崎市商業会館で「家船とシャアの話」をしている。その時の講演の記録が深淵久の発掘した新聞記事「家船—水上生活」〔柳田1976.8〕であった⁽⁷⁾。

現代から見ると、「家船」を特種な「水上生活民族」とみなすといった誤った知見が目立つ講演なのだが、ここで注目したいのは、柳田が1921年の1月という時点で早くも「水上生活」という言葉を用い、「家船」に言及していることである。「水上生活者」という用語の初見は、小川徹太郎によれば、同年3月に刊行された東京市社会局「水上生活者及浮浪者」『東京市内の細民に関する調査』（調査は1920年9月中旬～11月中旬に実施）である⁽⁸⁾。東京の港湾や河川において「炊事船（せじぶね）」が現れたのは日清戦争に相前後する頃だとされているが⁽⁹⁾、第一次世界大戦後の戦後恐慌による大都市圏での艀業の著しい打撃と、おそらくは第1回国勢調査（1920年10月）が契機となって、船内居住者として水上で生活する移動性の高い人びとへの関心が生まれていた。柳田は、ほぼ時を同じくして、大分県臼杵地方の津留の「シャア」や沖縄の糸満漁民のみならず、中国の「蜃民」、東南アジアの「水上生活を営む特種民族」にまで視野を広げ、アジア各地で「水上生活」を営む人びとという観点から長崎県の「家船」を取り上げている。陸地への定住をベースに組み立てられた近世以来の社会像や歴史認識—鶴見良行の言う「定着農耕的な、大地を中心とした歴史観」⁽¹⁰⁾—の下では、「水上の船・船頭のことから」（馬場伊之助）同様に、その存在が軽んじられ、歴史の深層に追いやられてきた船上生活漁民に初めて照明が当てられた講演と言ってよい。

当初、「水上生活者」という用語は、柳田民俗学においても「二六時中、常

に船を住家として一家庭を成し」ている人びとを総称する言葉として登場し〔柳田 1976.8〕⁽¹¹⁾、各地の船上生活漁民については個別の名称で語られていた。「家船」と一括りにされる存在ではなかったのである。

これ以降、大都市圏では水上生活者の社会事業調査が盛んに行われるようになり、行政担当者や社会事業家による調査報告・論文が 1920-30 年代に数多く刊行された。一方、1930 年代に入ると、地理学者、郷土の研究者、柳田国男の下で学んだ民俗学者らが、大分県の津留、長崎県の平戸、瀬戸、五島で、少し遅れて広島県の能地、吉和で「家船」の調査・研究を始める。当初、使い分けられていた各地の船上生活漁民を表す言葉に代わって、「家船」という用語が伝統的な「日本列島の船住居を総称する普通名詞」〔可児 1994.12〕として一般的に使われ始めるのは、「水上生活者」という用語が東京や大阪等の港湾・河川に現れた船内居住者を意味する言葉として社会に浸透する戦時下のことである。例えば中川恣は、瀬戸内海の船住まい漁民に対して「家船」という用語を使い、「広島県吉和の家船」(1940)と題する小論を著している。可児弘明が指摘するように、「家船」という二文字が「かなり要をえたことば」であった上に、「昭和初期に始まる民俗学者、地理学者の調査が、先ず九州の「家船」から始まっていること」が大きく影響したと思われる。

ともあれ、「水上生活者」の用語が日本の近代化と不可分な関係にあったとすると、「家船」は前近代の民俗社会に深く根差す用語として定着した。本稿では、「家船」について、「小船を住まいとして家族が居住し、主として海産物の採取と販売に従事しながら常に一定の海域を移動・出稼する漁民」とする小川徹太郎の緩やかな定義に従いたい⁽¹²⁾。

2. 「家船」研究の戦前・戦中・戦後

「家船」それ自体の研究史については、野口武徳〔野口 1987.1: 21-30 頁〕、可児弘明〔可児 1994.12〕、伊藤亜人〔谷川編 1992.5: 462-469 頁〕らによって批判的検討がなされている。本稿では、水上生活者の盛衰や社会事業調

査との関わりで「家船」研究史を概観したい。

第一期は、柳田国男が「家船」に関心を持って調べ始めた 1920 年代である。水上生活者の社会事業調査が開始され、次第に社会問題化する時期にあたっている。久保田登編『豊田郡佐江崎村誌』（1926）に船住まいで知られた能地漁民に関する貴重な記録が見られるが、「家船」研究という点で言えば、ただ一人柳田が 1921（大正 10）年に講演「家船—水上生活」を行い、1925（大正 14）年に芸予叢島への民俗採訪の報告「瀬戸内海の海人」を発表しているにすぎない。その少し前の 1910 年代半ばに『郷土研究』誌上で「豊後のシャア」が民俗学者の話題になっていたものの、それはシャア独特の風俗や伝説に対してであって、当地で「船屋」と呼ばれた船住居には関心が及んでいなかった。「家船」研究の胎動期と言えよう。

第二期は、水上生活者を対象とした社会事業調査が全盛期を迎える 1930 年代で、この時期になると、ようやく、地理学者吉田敬市の他、主に柳田国男の下で育てられた若き民俗学者たちによって、「家船」に言及する論文や著作が発表されるようになる。柳田は、1933（昭和 8）年に自宅で研究会「木曜会」を組織し、1935（昭和 10）年には「民間伝承の会」（後の日本民俗学会）を発足させて、全国各地の民俗学研究者組織化への第一歩を踏み出していた。「家船」に関する研究は、木曜会を中心に企画された全国の「海村生活調査」（1937-39）に参加した桜田勝徳、橋浦泰雄、瀬川清子らによって継承されていく。また、もう一つの民俗学の動きとして、渋沢敬三が 1921（大正 10）年に創設したアチックミュージアム・ソサイエティ（1942 年に日本常民文化研究所と改称）の形が次第に整い、1935（昭和 10）年頃、漁業史研究を担う渋沢水産史研究室が軌道に乗り始める。柳田より民俗学を学んだ桜田勝徳は、1935 年に研究員となって漁村民俗学を切り開き、1939（昭和 14）年には宮本常一が入って本格的な民俗調査に着手した。後に『漂流海民』を著す羽原又吉も外部研究者として関わっており、「家船」研究は、柳田の主宰する木曜会に加え、アチックミュージアムが拠点となって開幕したと言えよう。

1930（昭和 5）年前後というのは、東京の水上生活者の世帯数がピークを迎える時期である。と同時に、シェアの集落として知られる大分県の津留では早くも「家船」が激減し、陸上がりが決定的となった時期でもあった⁽¹³⁾。1937（昭和 12）年に刊行された大阪社会部庶務課『毛馬・都島両橋間に於ける家舟居住者の生活状況』は、伝統的な「家船」漁民と近代化の過程で発生した水上生活者との関連を考える上で示唆に富む調査報告書である。

第三期は、「家船」研究が本格的な展開を見せる 1940 年代前半である。1945（昭和 20）年の敗戦へと至る、第二次世界大戦下の時期にほぼ当たっている。太平洋戦争突入後、水上生活者に関する調査報告・論文は全く見られなくなった。これに対して、「家船」の根拠地をフィールドにした調査研究と出版は、戦局が深刻化し、日本本土への空襲が始まった 1942（昭和 17）年以降も着々と行われている。能地の船住まい漁民に関する先駆的な民俗採訪記録ともいえる瀬川清子の「漁村に関する覚書」が発表されたのは 1940（昭和 15）年であり、1942 年には桜田勝徳が『漁人』を刊行した。地理学者の小笠原義勝と吉田敬市の論文もこの時期である。1941（昭和 16）年頃から出版情勢が一段と厳しくなる中、瀬川清子の『販女』（1943）が刊行され、後に野口武徳により「わが国の家船、とくに長崎県の家船の研究史上において不朽ともいえる研究書」〔野口 1987.1 : 23-24 頁〕と高く評価された木島甚久の『日本漁業史論考』が、太平洋戦争末期の 1944（昭和 19）年に出版されていることをどう理解したらよいのだろうか。今後に残された課題である。

第四期は、1945（昭和 20）年の敗戦から 1960 年代頃までの時期である。敗戦直後の混乱が落ち着きを見せる 1950 年代以降、行政機関等による「水上生活者」調査が再開されたのに引き続き、行政の主導の下に初の「家船」民俗調査が実施された。

瀬戸内海沿岸各地の伝統的な「家船」は、水上生活者の陸上がりの促進が決定的となった高度経済成長期に入って急速に消失しつつある現状となり、広島県教育委員会は文化庁の指導と補助金を受けて 1968・1969（昭和 43・

44) 年度に大がかりな「家船民俗資料緊急調査」を実施した。桜田勝徳は、1954（昭和 29）年の段階で「海上漂泊を続けてきた漁業者」に言及し、「近年は陸上に住居を持つ者が多く、また運搬業に転じたものが、きわめて多い。都留のシェアなどは、ことに大阪市内の水上生活者の群の中に、多数投じている」と述べていた⁽¹⁴⁾。さらに、大阪の「水上生活者の起源」に触れて、「いわゆる夫婦船（めおとぶね）の瀬戸内海漂泊漁業者」とも無関係ではないと指摘していた。こうした状況の中、広島県教育委員会が調査地として選んだのは、比較的古い民俗を残していた因島市土生町箱崎（現在は尾道市）と三原市幸崎町能地であった。因島の箱崎では 1962（昭和 37）年に「家船」が 200 隻以上あったというが〔藤井 1970.11〕、竹原市忠海町の二窓では 1960（昭和 35）年頃までに「家船」の姿が見られなくなり〔小川 1985.12 : 138 頁〕、能地では 1969（昭和 44）年に一隻を残すのみとなっていた〔広島県教育委員会編 1970.3 : 266 頁〕⁽¹⁵⁾。1970（昭和 45）年には吉和でも「家船」を続けるのは一隻だけになっており〔八東・柳井 1971.4〕、宮本常一が関わった広島県教育委員会編『家船民俗資料緊急調査報告書』（1970）は、消え去ろうとする「家船」民俗を記録に留めた最後の報告書とも言えよう。

この時期には、以上の調査の一方で、敗戦前からの漁業史研究の成果として柳田国男編『海村生活の研究』（1949）、羽原又吉『日本古代漁業経済史』（1949）、宮本常一『海に生きる人びと』（1964）等が刊行され、その中で「家船」について触れられるようになる。また、羽原又吉『漂海民』（1963）は、「家船」に関する初の単行本であった。

第五期は、高度経済成長が終焉する 1970 年代から 1980 年代までの時期で、水上生活者関係の文献が減少し、代わって「家船」の論文・著作が数多く刊行された。東京では、1964（昭和 39）年 10 月開催のオリンピックに相前後して「水上生活者」が消滅していったと言われている⁽¹⁶⁾。ほぼ同時期に「家船」の姿も見られなくなるにも拘わらず、1970-80 年代には、野口武徳『漂海民の人類学』（1987）や河岡武春『海の民—海村の歴史と民俗』（1987）等、

「家船」に関する手堅く、充実した研究成果がいくつも発表されている。

それは、一つには、水上生活者とは異なって、「家船」の場合には根拠地があり、「家船」生活を体験した漁業者が陸上がりした後も根拠地で暮らし、あるいは、まだ現役漁師として漁を続けていたことから、体験者への聞き取りをベースにした実りある実地調査が可能だったためと考えられる。野口武徳、伊藤亘人、小川徹太郎らによって綿密なフィールドワークに基づく「家船」研究が発表されている。さらに、河岡武春、村岡浅夫・倉本澄、小川徹太郎らによる近世文書や伝承巻物（「浮鯛抄」）を駆使した「家船」研究という方向での進展も見られた。

もう一つには、広島県では、『竹原市史』、『新修 尾道市史』、『三原市史』等の自治体史が次々と刊行された時期でもあり、「家船」の根拠地である竹原市の二窓、尾道市の吉和、因島箱崎、三原市の能地の歴史に「家船」に関する記述が位置づけられるようになった。九州でも、長崎県西彼杵郡崎戸町の郷土史『崎戸町の歴史』（1978）が刊行されている。

第六期は、1990 年代以降である。「家船」の根拠地とされる各漁浦の船だまりから「家船」が消え、もはや「家船」生活の体験者を探すのが困難となった現代では、綿密なフィールドワークはもちろん、旅行者の素朴な聞き書きさえ難しいのが現状である。そのような中であって、中村昭夫・可児弘明『船に住む漁民たち』（1995）、沖浦和光『瀬戸内の民俗誌—海民史の深層をたずねて』（1998）、尾道学寮物語刊行委員会『尾道・吉和漁港 家船の子どもたちの記録 尾道学寮物語』（1998）、広島県豊島漁民の「近代的家船」の出現と適応を明らかにした金柄徹『家船の民族誌—現代日本に生きる海の民』（2003）等の優れた記録、研究がまとめられていることは特筆に値する。近年は、「浮鯛抄」や「尾道漁村記」等の近世漁民の伝承文芸、「家船」から生まれた漁民住宅や漁村の空間構成といった日常物質文化を資料とした研究が行われ、また、水上生活者や「家船」子弟の就学を保障するための水上学校、水上児童福祉施設に関する論文が多く出されている。

3. 近世瀬戸内の船住まい漁民に関する研究史再考

民俗学者が早くから注目していた大分県臼杵湾に臨む津留の漁民は「シャア」と呼ばれ、瀬戸内海沿岸の安芸国幸崎の能地漁民が1605（慶長10）年に移住したのが始まりであることが知られている〔河岡1987.2：68頁〕。能地漁民は、同じく九州の豊前国小倉の平松浦にも移住した記録が見られ、瀬戸内海を中心に広範囲に進出していた。

九州から始まった「家船」研究史において、人間の暮らしと子育ての習俗の視点から見て大変興味深いのは、「家船」の根拠地とされる広島県三原市幸崎町能地および隣接する竹原市忠海町二窓をフィールドにした一連の研究である。「家船」は、鉾突きやもぐりを得意とするアマとも無関係ではなく、対馬の曲や壱岐の小崎等に移住した鐘ガ崎のアマが、17世紀に陸地定着するまで船上生活を送っていたことが判明している〔伊藤1972.3〕〔宮本1964.8：54-85頁〕。古代のアマ（海人・海士・海女・白水郎・海部・蜃）との関連を全否定できない面がある一方〔羽原1963.11：100-101頁〕、瀬戸内海の船住まい漁民が先の能地や二窓を根拠地として定めるようになったのは中世末頃とされている〔宮本1964.8：193-195頁〕〔河岡1987.2：68頁〕。瀬戸内海の「船住まい」の場合、九州の「家船」とは異なって潜水漁は行わず、根拠地ごとに異なる漁法を有していた。一種の分業によって共存しあっていたと考えられている〔金2003.7：26頁〕。

とりわけ能地漁民は、出漁の際に必ず「浮鯛抄」（由緒書）を持参し、漁業権の規制を受けずに広範囲にテグリ網（小網）で雑魚曳きをしたことで知られる。瀬戸内海各地に勢力を拡げ、多くの枝村を形成していった。「瀬戸内海漁業の発祥の地」〔三原市役所2006.3：301頁〕とも言われる所以である。

この能地を採訪し、初めて本格的な民俗調査を行ったのは瀬川清子であった。柳田国男の指導の下、1937-1939（昭和12-14）年度の「海村生活調査」に調査員として参加した瀬川は、1939（昭和14）年3月24日から4月1日にかけて広島県豊田郡幸崎村字能地（当時）を訪れ、「採集手帖（沿海地方用）」

に詳細な記録を残している。この採集手帖は、全国各地で統一的な調査を行うために予め質問すべき 100 項目を選定して作成された、いわゆるフィールドノートであった。その成果の一つが「漁村に関する覚書」(1940)であり、後に名著『販女』(1943)がまとめられている。

多くの研究者に引用される「藻が三本あれや曳いて通れ、家が三軒あれば売つて通れ」という金言は、その長い一生を小網で暮らしたという鎗野寅吉氏が、親々から聞いた先祖の言葉として瀬川に教えてくれたものだった〔瀬川 1940.1〕。能地の漁師は、夜の間、小網を藻の上で曳いて漁をし、その採れた雑魚を漁師の「家内が魚をハンボウ(桶)に入れてカベツテ(頭上運搬)陸の村々に売りに歩く」。また、「米とカヘコトしたり」して暮らしを立てた。九州の「家船」にも共有された生活様式である。「皆、船に家内や子供を連れて居るので難儀な者が多く、船を寄せた先々で一升買ひをして食うて過すのぢやが、渡世困難で行先に居つてしまつて村に帰らぬ者も多かつた」と、鎗野氏は語っていた。

能地では、1887(明治 20)年頃にテグリ網漁から旧式の打瀬船による漁へと切り替えが進み、高能率で行動力のある愛知県型打瀬船が明治末年に導入されてからは、家族で乗り込むのではなく、若い者を 2、3 人雇って基地から出漁する漁業が多くなっていた。大正期には石炭船に乗り換えた者も多く、帆船運送業以外にも行商船や、陸上がりしての商売、工場労働者への転身等によって船住まいの民俗が急速に失われ始めていた〔三原市役所 1979.9: 326-351 頁〕。そうした現状の中で、瀬川は故老の話に耳を傾け、さらに明治初年の壬申戸籍に着目してかつての能地漁民の世帯数(漁渡世者約 450 世帯のうち約 300 世帯が船居住者で、戸籍中の 1 冊は「船住号」と表記されている)を調べ、瀬戸内海各地への移住散在の一端を紹介している。

この瀬川清子の研究を発展させたのが、日本常民文化研究所の河岡武春による『海の民—漁村の歴史と民俗』(1987)である。能地にある臨濟宗善行寺の「過去帳」(1704-1887)を整理し、能地と二窓東方の船住まい漁民が瀬

戸内海各地に分村・移住・出漁（寄留）地を形成していった範囲を見事に解明した。二窓浦は、御調郡吉和浦（現在は尾道市）の漁師と豊田郡能地浦の漁師が開いたところだと言われており、東方と西方という、出自も漁法も習俗も異なる二つの分村から成っていた〔河岡 1987.2 : 27 頁、97-98 頁〕。能地から来た者を東方と言い⁽¹⁷⁾、1469（文政元）年創建の善行寺は能地と二窓東方の漁民の大半にとって檀那寺であった。河岡は「能地・二窓の枝村分布図」を作成し、18世紀初頭以降、枝村が現在の香川・岡山・愛媛・広島・山口・福岡・大分の7県、約100カ所を超える数に達していることを鮮やかに描き出している〔河岡 1987.2 : 24-52 頁〕。東は備前（岡山県）牛窓方面から小豆島、西は九州の豊前（福岡県）小倉の平松浦まで、瀬戸内海全域と九州西北部のかなり広い海域にわたっていた。

1970年代に入ると、二窓郷土史研究会の倉本澄が中心になって、同氏が所蔵する「東浦役所文書」の史料の解読が精力的に進められ、吉和から移住してきた二窓西方を含む二窓浦全体の歴史の一端が明らかにされた〔村岡浅夫・倉本澄 1981.8〕。同文書には「二窓浦年貢及び海に関する税金」〔倉本澄 1978.11〕の資料が含まれており、この資料群の解読により、従来、「漂海民」や「漂泊漁民」という言葉で一括りに語られてきた「家船」漁民のイメージとは異なった、近世専業漁民の多面的な実相が浮かび上がる可能性がある。

さて、野口武徳のもとで修士論文『瀬戸内の船住い漁民—その民俗誌的研究』をまとめた小川徹太郎は、この二窓浦を中心に能地、吉和、箱崎、豊島の各漁浦に足繁く通い、一人前の漁師として「食べるようになる」ための技能の習得過程をテーマとした優れた研究を残している〔小川 1991.3〕〔小川 1993.11〕。さらに、「近世瀬戸内の出職漁師—能地・二窓東組の「人別帳」から」（1989）では、河岡武春が資料とした善行寺の「過去帳」に加えて、1833（天保4）年の「宗旨宗法宗門改人別帳」と「御用日記」を用い、近世末期における能地・二窓東組の漁民の出職（出漁）先の分布をめぐる問題を、より全体的な関係性の「場」の内に描き出すという画期的な取り組みに挑ん

だ。同論文によれば、能地・二窓東組の漁師は、本拠地の寺院の「人別帳」によって「耄人も不残」個体を識別・登録しようとする視線」に曝されていた。と同時に、この時期、幕府は、日中貿易における必要性から俵物の生産力を最大限に拡充するために、「全国」すべての浦浜に強制的に俵物生産を課すことのできる、いわゆる生産高「請負制」を 1799（安永 8）年に導入しており、両浦漁師の出職は、こうした「全国」ネットの施策の展開とも無関係ではなかったという〔小川 2006.7 : 190-225 頁〕。小川は、能地・二窓東組の漁師に関して、先の河岡の研究を踏まえながら次の点を指摘する。

第一に、幕府の俵物貿易が本格的な展開をみせる 1700 年代初頭（特に享保期 1716-1735）の頃に、両浦の漁師による瀬戸内海全域への寄留・移住現象が見られるようになること。

第二に、それから約 100 年を経た 1800 年代に、両浦の漁師の人口増加と他国への頻繁な出職が顕著になること。ちなみに、1833（天保 4）年の「人別帳」によると、両浦出職者の人口は地元在住者の約 3、4 倍を占めていた。

第三に、1800 年代の両浦の出職者は、深く俵物（生海鼠）生産に関与していたこと⁽¹⁸⁾。

以上の 3 点は、瀬戸内海における「能地漁民の展開」〔河岡 1987.2 : 68-74 頁〕の核心に触れる重要な指摘なのだが、本論で注目したいのは人口増加の方である。

太田素子は、福島県会津地方の天保期（1830-1843）の願書から、山の民である木地挽きの家族構成が、貧農の少子家族と対照的に子沢山（平均子ども数は、農家が 2.66 人、木地挽き家族が 5.3 人）で大家族が多かったことを明らかにしている⁽¹⁹⁾。能地の漁師は、由緒書を携え、山中で移動して暮らした職能集団の木地師と同様に、出自に関する歴史伝承を記した巻物の由緒書「浮鯛抄」を持って一定の海域を移動しながら漁を行った。もちろん、幕府による俵物生産力の拡充政策を背景とした他所からの参入ということを考慮しなければならないのだが、「船住まい」の場合、「増大する人口に対処して、

海岸に家を密集させていくかわりに、船一そうと漁具一式をもって家船の分家が行われ」〔羽原 1963.11 : 128 頁〕、それが広い海に向かっての他国への居留・移住を後押ししたとも考えられる。近世農村（特に東北や北関東）に「子返し」（間引き）の習俗が浸透していたのに対して、海に生きた人びとの間では、漁の仕事が人手を多く要することもあり、子返しはあまり見られなかったのではないか。宮本常一は、「船住居というのは、中世から近世にかけて、幼少児の死亡率のきわめて高かった時代に、子供の死亡率の低い生活方法であった。母親が絶えず子供を見ることができ、魚を多く食べることで栄養も十分取ることができ、生まれた子供の多くはそのまま成長していった。そのうえ分家が簡単であった」と、述べている〔三原市役所 1979.9 : 325 頁〕。豊かな漁場に恵まれたかつての瀬戸内海では、むしろ、「貰い子」や「舵子」の風習が広く行われていた〔宮本 1959.7 : 解説〕。

最後に、能地と二窓の「名替え」について、早くから瀬川清子と河岡武春が注目していることに触れておきたい。例えば、瀬川は藩政時代に「名替祭」と呼ばれた能地の春祭り（旧正月 27、28 日の常磐神社祭典）について〔広島県教育委員会 1970.3 : 247-250 頁〕〔三原市役所 1979.9 : 728-732 頁、789-794 頁〕、次のように解説している〔瀬川 1940.1〕。

この祭典は一にナガヘマツリと云つて村の男子が一人前の男子と認められる機会となる元服祭であつた。そして名替をせぬ者には婚姻も許さず、漁渡世の自立も許さなかつたので、陸上海上を問はず、能地の社会組織の中に生活する者には祭の時に村に帰へる事は必須の義務であつた。

河岡によれば、二窓浦にも古くから男子に名替えがあつて、東組・西組とも厳重に行われていた。旧正月 14 日に行い、翌日にはシンメイサン（トンド）を浜ではやしたという〔河岡 1951.3〕。元服に際しての名替えは古い時代には成人式の際に必ず行われていたが⁽²⁰⁾、「家船」の研究史において祭りの際に名替えを重視する例は他ではあまり見られない。

おわりに

「家船」と総称されている瀬戸内海の船住まい漁民の存在を知り、心惹かれるようになったのは、昭和初期に成熟期を迎える日本型近代家族の暮らしの痕跡を訪ねて、旧東京市十五区内の各地を歩いていた頃のことである。日本の近代家族のメッカは、東京山の手地域とばかり思っていたところ、当時、研究プロジェクト「東京—市民のくらしと文化」に取り組んでおられた和光大学総合文化研究所所長の塩崎文雄氏より、かつて江戸湊として賑わった鉄砲洲本湊町（東京市京橋区本湊町、現在の中央区湊 1 丁目）に昭和戦前期の東京市民の生活文化を享受する豊かな暮らしがあったことを教えていただいた⁽²¹⁾。同地に居を構えた貸地・貸家業を営む福井家の家族生活は、まさに近代家族そのものの姿であった。そればかりか、昭和初期というのは東京の水上生活者の世帯数がピークを迎えた時期でもあり、鉄砲洲本湊町は舳船内に居住している水上生活者の拠点の一つとなっていた。

幼少期に鉄砲洲の鈴木学校で学んだ日本画家鏑木清方の描いた一枚の屏風絵「讚春」(1933)⁽²²⁾が忘れられなかった。右隻には皇居前広場で富士見櫓を背景に語らうセーラー服を着た女学生二人が自動車とともに描かれ、左隻には隅田川に碇泊する高瀬船の中で憩う着物姿の水上生活者の母と子が穏やかな春の陽光に包まれていた。前方に架かっているのは、1928（昭和 3）年に完成したばかりの近代的な清洲橋である。昭和初期の東京、その一隅を占める鉄砲洲本湊町界隈で繰り広げられる庶民の日常生活世界が見事に表現されていた。来るべき世界と失われてゆく世界、新と旧が複雑な交錯をなして織り込まれ、日本の近代社会の成り立ちの縮図そのものであった。

水上生活者の社会事業調査では、一般に、水上生活者に対して「時代知識に浅薄」で「教育上欠陥ある人物」と見る偏った評価がなされている。それ故、「現代文化生活の高調される時代」にあつて、為政者や識者は、水上生活者を「指導薫陶」し「教化」できるような「文化的生活の施設」を実現すべきである、との主張が繰り返された。「不就学児童」問題は、その象徴で

あり、就学による「匡正」への期待が語られた⁽²³⁾。だが、本当にそうなのだろうか。素朴な疑問が湧いた。こうした見方は、明治期に登場した「家庭教育」概念と同じく、「国家の教育政策」〔可児 1995.4 : 42-47 頁〕、「学校の論理」⁽²⁴⁾に依拠した偏ったものなのではないのか。例えば、「水上生活者」の出自の一つとされる利根川水系の高瀬船の故郷では、高瀬船に固有の労働の世界、生活様式、人生儀礼、子どものしつけがあったはずである。人類史の底流で脈々と受け継がれてきた、「学校の論理」とは異質な人間教育の原理を明らかにしたいと思った。遅くとも中世にまで遡る歴史をもった「家船」に関心を抱いたのは、そんな理由からである。

大小の島々の浮かぶ穏やかな瀬戸内海の呉線沿いを歩いて思うのは、何よりも文化水準の高さである。能地の春祭り、二窓の神明祭、福田の獅子舞は今も地元の方々に大切に受け継がれ、次の世代を守り育てている。ハレの日の祭りを担う子どもや若者の、時に真剣な、時に溢れんばかりの笑顔の、澁澁とした表情が心から離れない。時は中世の半ばから近世にかけて、大きな時代の転換期を迎えて村や町での人びとの定住化が進み、「家」社会が形成されてゆく中、能地と二窓に根拠地を定めた船住まい漁民は、近代家族に近い父—母—子から成る核家族の形態をとって広い海へと繰り出し、子どもが成人するまで同じ船で暮らすという生活様式を選んだ。藻場や砂堆、干潟に恵まれ、漁だけで生計の立てられる平穏で豊かな海があったからである。生みの親だけで子どもを一人前の漁師に育て上げる難しさに直面することもあったであろう。それをどのような工夫で乗り越えたのか。この地に伝承される祭りには、人間が人間として成長していくために不可欠な経験とは何かを考えるためのヒントが多く隠されている。海に生きた人びとの子育ての習俗と成年式という視座から、瀬戸内海の船住まい漁民の人間形成について考えることを、今後の課題としたい。

注

- (1) 群馬県上野村在住の哲学者内山節氏の談話による。また、同氏のエッセイにも触れられているという (<http://www.yamasai.com/20060730.html>.2015 年 9 月 24 日)。
- (2) 富山和子『環境問題とは何か』PHP 新書、2001 年、20-22 頁。
- (3) 馬場伊之助『明治百年東京はしげ物語』湘南版画工房、1969 年、1-3 頁。「/」は改行を、「…」は中略を表す。なお、文末参考文献の引用は〔 〕内に示す。
- (4) 宮本常一「海をひらいた人々」〔宮本 1955〕(『宮本常一著作集 8 日本の子供たち・海をひらいた人びと』未来社、1969 年、193-204 頁)。また、〔宮本 1964.8 : 60-74 頁〕にも詳しく記載されている。
- (5) 貝原益軒編『日本釈名 中』梅福軒蔵版、1699 (元禄 12) 年に成立、17 丁裏-18 丁表 (「人品」)。
- (6) 「年譜」(鎌田久子作成)『定本 柳田国男集 別巻 5 (新装版)』筑摩書房、1969 年、632 頁。
- (7) 「東洋日の出新聞」1921 年 2 月 25 日付～3 月 9 日付の記事 (全 6 回連載)。柳田国男「家船」〔柳田 1976.8〕は、それを復刻したものである。詳しくは、深潟久「柳田国男先生と長崎」『えとのす』第 6 号、1976 年 8 月、参照。
- (8) 小川徹太郎「文献資料にみる戦前日本の水上生活者」〔小川 2006.7 : 88-89 頁〕。戦前における水上生活者関係の文献については、同論文末の一覧を参照されたい。
- (9) 小川徹太郎「水上生活者」小木新造他編『江戸東京学辞典 新装版』三省堂、2003 年。その後、水上生活者は日露戦争を契機として増加し、関東大震災後にも増加を見ている。好況期に増加し、不況期に減少する傾向が認められる。なお、「炊事船」とは、港湾や河川において小運送に従事する舢舨内に居室を有するものを言う。
- (10) 鶴見良行『東南アジアを知る—私の方法』岩波新書、1995 年、112 頁。
- (11) 「水上生活者」という用語について、諸種の定義を検討した小川徹太郎は、注(8)の文献の中で、社会事業家が便宜的に「船内に居住するという「居住形態」に着目して用いているに過ぎないと述べている〔小川 2006.7 : 88 頁〕。
- (12) 小川徹太郎「文献資料にみる戦前日本の水上生活者」〔小川 2006.7 : 103 頁〕。羽

原又吉ら多くの研究者は、「家船」の定義に「土地・建物を陸上に直接所有しない」という特色を入れるが、それは「漂海民」や「漂泊漁民」、「海のジプシー」といった「家船」研究史の中で醸成されたイメージに付随するもので、必ずしもあらゆる地域のどんな時代にも当てはまるものではない。陸地との関係は、時代の政治的・経済的な状況、地域的特性、漁法、家族構成等により多様な形態をとる。

- (13) 津留では、1930（昭和5）年の時点で155～156戸のうち140戸が陸上に住みかえを済ませていた〔可児1994.12〕〔吉田1930.4〕。また、出先地への移籍か、陸上がりか等の詳細は不明だが、能地でも、1925（大正14）年に128艘あった漁業者が、翌年には75艘に激減している〔三原市役所1979.9：344頁〕。
- (14) 桜田勝徳「水上生活者」日本民族学協会編『日本社会民俗辞典2』誠文堂新光社、1954年（『桜田勝徳著作集2 漁民の社会と生活』名著出版、1980年、所収）。
- (15) 「我が町177 三原市幸崎町」（『読売新聞』1981年10月12日）によれば、能地の「家船」は1965（昭和40）年に姿を消しているので、「家船」の船体のみが残っていたと思われる。その後、三原市歴史民俗資料館の裏庭に展示されていた。
- (16) 例えば、川田順造『江戸＝東京の下町から一生きられた記憶への旅』岩波書店、2011年、156頁。
- (17) ただし、「その人の血管血筋にて東西を分けて」おり、「家居は東西混在」していた〔河岡1987.2:97-98頁〕。また、東方は「御他領遠方へ出漁に行き、盆正月に所へ帰るのみでその他は余程の事がなくては帰ることは稀である」のに対して、西方は「近海漁業であるから、隔晩或いは三、四日振りに出帰りをする」（同前）。これは、文政2年の「豊田郡忠海町村国郡志御編集下しらへ書出帳」に依拠するものであるが、〔村岡・倉本1981.8〕は同資料に誤りがあるとの見方を示しており、二窓浦については今後の課題である。なお、西方は、忠海の勝運寺を檀那寺としていた。
- (18) 小川徹太郎は、二窓に関しては「東浦役所文書」（倉本澄氏蔵）を根拠に、また、能地に関しては、〔池内1956.1〕を手掛かりに、このような結論を導き出している。
- (19) 太田素子『子宝と子返し—近世農村の家族生活と子育て』藤原書店、2007年、174-175頁。

- (20) 同前、42 頁、70-74 頁、150-152 頁、300-301 頁。
- (21) 塩崎文雄「江戸の地霊・東京の地縁—鉄砲洲本湊町の「福井家文書」を読む」塩崎文雄監修『東京を暮らす—鉄砲洲「福井家文書」と震災復興』八月書館、2013 年。
- (22) 鐙木清方筆「讃春」六曲一双、1933 年、三の丸尚蔵館所蔵（東京国立博物館・宮内庁他編『皇室の名宝—日本美の華』NHK 他発行、2009 年、160-161 頁、197-198 頁、参照）。
- (23) 草間八十男「水上労働者の生活」『社会事業』第 5 卷第 3 号、1921 年 6 月。同『水上労働者と寄子の生活』文明協会、1929 年。東京府学務部社会課『水上生活者の生活現状』（社会調査資料第 19 輯）、1933 年。
- (24) 小川徹太郎「文献資料にみる戦前日本の水上生活者」〔小川 2006.7 : 93-96 頁・101 頁〕。

謝 辞

本論文は、（公益財団法人）前川財団「平成 26 年度家庭教育研究助成」を受けて調査研究した成果の一部をまとめたものです。研究助成をしていたいただいた前川財団に対し、深く謝意を表します。また、文献資料の蒐集、現地調査にあたり、周防大島文化交流センター、広島県立図書館、三原市立中央図書館、三原市歴史民俗資料館、郷土と南山先生を語る会、尾道市立中央図書館、尾道市立因島図書館、竹原市立竹原書院図書館、忠海地域文化伝承協議会の皆さまに大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

「家船」に関する参考文献

NO.	発行年	月	著者	著書・論文等、発行所
1	1907 (明40)	10		「家なき国民」(第3章 西彼杵郡)『長崎県紀要』第二回関西九州府県連合水産共進会長崎県協賛会
2	1915 (大4)	8	土居暁風	「豊後のシャア」『郷土研究』3-6
3	1915	10	伊藤東	「豊後シャア村の事ども」『郷土研究』3-8
4	1916	1	喜田貞吉	「豊後シャア部落民赤色を好むといふ事に就いて」『郷土研究』3-10
5	1925	11	柳田国男	「瀬戸内海の海人」『民族』1-1
6	1926 (昭元)	6	久保田登編	『豊田郡佐江崎村誌』 (1994年7月に復刻版を刊行(村上徹))
7	1930	4-	吉田敬市	「家舟的聚落の生活を見る(上)(中)(下)」『歴史と地理』25-4、5、6
8	1932	10	桜田勝徳	「家舟の噂」『俚俗と民謡』1-9
9	1933	4	中村重嘉	「瀬戸家船小見」『長崎談叢』12
10	1933	7	柳田国男	「漁村語彙(三)」『島』1-3
11	1933	9	橋浦泰雄	「肥前五島日記(下)」『島』1-8
12	1933	5	山口麻太郎	「壱岐の小崎蟹に就て」『社会経済史学』3-2
13	1934		橋浦泰雄・久保清	『五島民俗図誌』一誠社
14	1934		桜田勝徳	『漁村民俗誌』一誠社
15	1936	7	宮本常一	『周防大島を中心としたる海の生活誌』(アチックミュージアム彙報11)アチックミュージアム
16	1937	3	大阪市社会部庶務課	『毛馬・都島両橋間に於ける家舟居住者の生活状況』(社会部報告第223号)
17	1938	12	柳田国男・倉田一郎	『分類漁村語彙』民間伝承の会
18	1939	3	瀬川清子	「採集手帖(沿海地方用)―広島県豊田郡幸崎村」(昭和14年3月24日～4月1日)(岡田照子監修・刀根卓代解説『瀬川清子「採集手帖 沿海地方用」DVD』岩田書院、2014年2月、所収)
19	1939	11	中川恣	「平戸「幸の浦」の家船」『水産界』684
20	1940	5	中川恣	「平戸幸ノ浦の「家船」」『舵』9-5
21	1940	8	中川恣	「広島県吉和の家船」『舵』9-8
22	1940	1	瀬川清子	「漁村に関する覚書」『社会学』7(日本社会学会年報)岩波書店
23	1940	7	小笠原義勝	「瀬戸内海の漁村と農村」『地理学評論』16-7
24	1941	3	吉田敬市	「日本に於ける家舟的聚落の調査」『東亞人文学報』1-1
25	1941	9	木島甚久	「瀬戸町家舟部落の研究―漁民史の一片として」『長崎談叢』28
26	1942	2	亀川信人	「家舟生活者の生活と習俗」『厚生問題』26-2
27	1942	12	木島甚久	「瀬戸町家舟部落の研究」『長崎談叢』31
28	1942	7	桜田勝徳	『漁人』六人社
29	1943	4	小笠原義勝	「漁民の分布」『地理学評論』19-4

30	1943	10	瀬川清子	『販女』三国書房
31	1944	2	木島甚久	『日本漁業史論考』誠美書閣
32	1949	3	井之口章次	「瀬戸家船探訪記」『民間伝承』13-3
33	1949	4	柳田国男編	『海村生活の研究』日本民俗学会
34	1949	6	羽原又吉	『日本古代漁業経済史』改造社
35	1951	3	河岡武春	「名替まつり」『民間伝承』15-3
36	1951	12	河岡武春	「能地漁民の展開」『民間伝承』15-12
37	1952	10	山階芳正	「五島家船について」『九学会年報(人類科学) 4 漁民と対馬』関書院
38	1952	11	篠崎道雄	「美しき島々の蔭に—瀬戸内海における家船のはなし」『漁村』18-11
39	1952		桜田勝徳	「家船」日本民族学協会編『日本社会民俗辞典 1』誠文堂新光社
40	1952-1955		羽原又吉	『日本漁業経済史』(全4巻)岩波書店
41	1953	10	余田博通	「内海漁民の階層分化—尾道市吉和町の実態調査」『経済季報』1-1
42	1955	2	河岡武春	「浮鯛系図」覚書『芸備地方史研究』10
43	1955	4	柳田国男監修・民俗学研究所編	「家船」「家船の生活」『日本民俗図録』朝日新聞社
44	1955	12	河岡武春	「海の人—能地漁民のはなし」和歌森太郎他編『日本文化風土記 6 中国・四国篇』河出書房
45	1955		宮本常一	『海をひらいた人々』筑摩書房(小学生全集)
46	1956	1	池内長良	「近世における漂泊漁民の分散定住と地元との関係—瀬戸内漁村の歴史地理学研究第二報」『伊予史談』142
47	1957	9	岩波書店編集部(編集)・広島県 岩波映画製作所(写真)	『岩波写真文庫238 広島県—新風土記』岩波書店
48	1958	3	金田譲之助編	『吉和の今昔』金田譲之助(尾道市吉和町)
49	1958	10	宮本常一	『中国風土記』広島農村人文協会
50	1958	12	野口武徳	「家船の社会的制約」『日本民俗学会報』4
51	1959	7	中村由信(写真)・宮本常一(文)	『瀬戸内海』角川書店
52	1959	9	野口武徳	「家船の女」『女性と経験』14
53	1959	12	角田直一	『十八人の墓—内海漁民の一断面』瀬戸内海文化連盟
54	1960	1	宮本常一	「瀬戸内海の漁業」地方史研究協議会編『日本産業史大系 7 中国四国地方篇』東京大学出版会
55	1960	4	野口武徳	「家船と宿」『社会人類学』2-4
56	1960	10	野口武徳	「家船の陸地交渉」『日本人類学会・日本民族学会連合大会第14回紀事』
57	1961	5	宮城雄太郎	「ある漁村の素顔—広島県の豊島探訪記」『漁村』27-5
58	1962	10	岡野良男・藤井昭	「箱崎の家船」『広島県文化財ニュース』16
59	1963	11	羽原又吉	『漂海民』岩波書店(岩波新書)

60	1964	8	宮本常一	『日本の民衆史 3 海に生きる人びと』未来社
61	1964	12	西村嘉助・渡辺則文編	『竹原市史 3 史料編(1)』竹原市役所
62	1965	3	鮎本虎次	「三原市幸崎町能地(家船)」『広島県文化財調査報告』5
63	1965	3	藤井昭	「因島市土生町箱崎(家船)」『広島県文化財調査報告』5
64	1965	8	末広恭雄	「能地の浮鯛」『海の世界』12-8
65	1965	8	宮本常一	『瀬戸内海の研究』未来社
66	1965	10	中村由一(写真)・宮本常一(解説)	『瀬戸うちの人びと』社会思想社
67	1965	11	河岡武春	「鯨と格闘した勇敢な海士たち」『海の世界』12-11
68	1965	11	瀬川清子	「女性史のなかの海女」『海の世界』12-11
69	1965	11	野口武徳	「家船の孤獨な漂泊者」『海の世界』12-11
70	1966	10	柳田国男指導・日本民俗学会編	『離島生活の研究』集英社
71	1966-1967	5-	萩幸朝・波止元忠夫	「幸崎風土記(その1)~(その3)」『三原春秋』3~5
72	1967	5	野口武徳	「海上漂泊漁民の陸地定着過程」『成城学園五十周年記念論文集:文学』
73	1967	9	野口武徳	「沖縄糸満漁民と長崎県家船の定着の比較」『日本人類学会・日本民族学会連合大会第21回紀事』
74	1968	3	青木茂編	『因島市史』因島市史編集委員会
75	1968	11	田中享一	「家船の由来と漁撈の概要」『大村史談』4
76	1969	3	広島県教育委員会	『昭和43年度 箱崎能地地区 家船民俗資料緊急調査概報』広島県教育委員会
77	1969	6	宮本常一	『私の日本地図 6 瀬戸内海II 芸予の海』同友館
78	1969	9	栗栖武士郎	「家船民俗調査の取材」『広島県文化財ニュース』42
79	1969	10	白松克太	「能地の獅子太鼓」『文芸三原』5
80	1969		村上直次郎訳・柳谷武夫編	『新異国叢書 4 イエズス会日本年報(下)』雄松堂書店
81	1970	3	広島県教育委員会	『家船民俗資料緊急調査報告書』広島県教育委員会
82	1970	10	瀬川清子	『海女』未来社
83	1970	11	藤井昭	「因島箱崎における家船の成立をめぐって」『芸備地方史研究』83・84合併号
84	1970		村川堅固他訳	『新異国叢書 6 セーリス日本渡航記/ヴィルマン日本滞在記』雄松堂書店
85	1971	4	八束美由紀・柳井由美子	「瀬戸内に家船を訪ねて一吉和の家船」『海事史研究』16
86	1971	4	瀬川清子	『販女—女性と商業』未来社
87	1972	1	ひろしま・みんぞくの会 村岡浅夫編	『広島県民俗資料 5 冠婚葬祭と家の問題』ひろしま・みんぞくの会
88	1972	3	西村嘉助・渡辺則文・道重哲男編	『竹原市史 1 概説編』竹原市役所

89	1972	3	伊藤亜人	「漂泊漁民—その生態をめぐって」『教養学科紀要』(東京大学教養学部教養学科)4
90	1973	1	藤井昭	『日本の民俗 広島』第一法規出版
91	1973	3	野口武徳	「漂泊漁民と国家—陸上民秩序への収斂の構造」『情況』3月号
92	1973	4	野口武徳	「家船と糸満漁民—水上生活者の移動と定着」『Energy』10-1
93	1974	2	記念誌編集小委員会	『創立百周年記念誌』尾道市立吉和小学校創立百周年記念事業推進委員会
94	1974	7	宮本常一・川添登編	『日本の海洋民』未来社
95	1975	3	青木茂編著	『新修 尾道市史 4』尾道市役所
96	1975	12	宮本常一	『宮本常一著作集 20 海の民』未来社
97	1976	8	柳田国男	「家船」(1921年2月講演)『えとのす』6
98	1976	8	深淵久	「家船の人々」『えとのす』6
99	1977	7	伊藤亜人	「漁民集団」『講座比較文化 6 日本人の社会』研究社
100	1977 1978	9 3	二窓郷土史研究会	「民俗資料(第一部) その1・その2」『竹原春秋』14・15
101	1978	1	広島県	『広島県史 民俗編』広島県
102	1978	3	[中国新聞社編]	『芸南地方・瀬戸の島』中国新聞社
103	1978	3	瀬戸内海歴史民俗資料館	「家船のミズガメ」『瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具と習俗』
104	1978	11	二窓郷土史研究会・倉本澄	「二窓浦年貢及び海に関する税金」『竹原春秋』16
105	1978		崎戸町教育委員会・「崎戸町の歴史」編さん委員会編	『崎戸町の歴史』長崎県西彼杵郡崎戸町
106	1979	9	三原市役所	『三原市史 7 民俗編』三原市役所
107	1979	11	河岡武春	「漂泊漁民の伝承文芸—「浮鯛系図」考」五来重他編『講座日本の民俗宗教 7 民間宗教文芸』弘文堂
108	1980	3	野口武徳	「海上漂泊漁民の差別の構造(1)」『民俗学研究所紀要』4
109	1980	8	倉本澄	「浅野藩となつての二窓」『安芸津風土記』42
110	1980	10	辻井善弥	「家船と潜水漁」河岡武春編『講座日本の民俗 5 生業』有精堂出版
111	1980	11	倉本澄	「二窓とは」『安芸津風土記』43
112	1981	1	頼杏坪他編著	『芸藩通志』(全5冊)図書刊行会(原本は文政8年完成、1907~1915年刊の複製)
113	1981	2	田中幸人・東靖晋	『漂民の文化誌』葦書房
114	1981	8	村岡浅夫・倉本澄	『フォクロア・ひろしま 特集 竹原市忠海町 二窓浦』8・9(合併号)ひろしま・みんぞくの会
115	1981	12	宮本常一	『日本文化の形成』(全3冊)そしえて
116	1982	3	野口武徳	「家船部落の社会構成—とくに社会集団を中心として」『日本常民文化紀要』8(2)

117	1982	5	藤野保編	『大村郷村記 5』図書刊行会 (文久2年に完成した大村藩の『郷村記』を復刻)
118	1982	6	中島忠由・岡本馨編著	『ふるさとの思い出 242 写真集 明治・大正・昭和因島』図書刊行会
119	1983	1	野口武徳	「家船の崩壊過程と社会的緊張—とくに市場の関係と通婚関係」『日本常民文化紀要』9
120	1983	7	倉本澄	「二窓浦のかべりさん」『民具・マンスリー』16-4
121	1983	10	河岡武春	「黒潮の海人」『日本民俗文化体系 5 山民と海人』小学館
122	1983	10	野口武徳	「船霊とエビス」『日本民俗文化体系 5 山民と海人』小学館
123	1983	10	伊藤亜人	「漁民集団とその活動」『日本民俗文化体系 5 山民と海人』小学館
124	1984	2	網野善彦	『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店
125	1984	2	野口武徳	「海上漂泊漁民の差別の構造(2)」『日本常民文化紀要』10
126	1984	10	野口武徳	「陸に上がる東南アジアの漂海民」家島彦一・渡辺金一編『イスラーム世界の人びと(4) 海上民』東海経済新報社
127	1984	10	岡田三郎	『古里の証』岡田三郎(尾道)
128	1984		〔豊浜町立豊浜学寮編〕	『豊浜町立豊浜学寮要覧 昭和59年度』豊浜町立豊浜学寮
129	1985	5	藤井昭	「因島の家船」『日本民俗文化体系 13 技術と民俗(上)』小学館
130	1985	12	小川徹太郎	「図説 生活空間としての船」大林太良他編『日本人の原風景 2 蒼海訪神 うみ』旺文社
131	1986	7	小川徹太郎	「船住い漁民の漁撈活動体系—広島県二窓浦木江組の場合」『ふいと』1
132	1986	5	吉和町誌編集委員会編	『吉和町誌』吉和町誌編集委員会
133	1986	5	倉掛喜八郎	『ポンポン船の旅—瀬戸内漂泊』大阪書籍
134	1986	12	野間宏・沖浦和光	『日本の聖と賤 近世篇』人文書院
135	1987	1	野口武徳	『漂海民の人類学』弘文堂
136	1987	2	河岡武春	『海の民—漁村の歴史と民俗』平凡社
137	1987	2	大林太良編	『日本の古代 8 海人の伝統』中央公論社
138	1987	3	倉本澄	「浅野藩と忠海」『竹原春秋』20
139	1987	11	伊藤亜人	「漂泊漁民の伝統」浜田隆士編『東京大学教養講座16 海と文明』東京大学出版会
140	1987		高橋公明	「中世東アジア海域における海民と交流—済州島を中心として」『名古屋大学文学部研究論集. 史学』33
141	1988	10	小川徹太郎	「ある行商船の終焉」『民話と文学』20
142	1989 (平成)	6	久田松和則	『大村史—琴湖の日月』図書刊行会
143	1989	9	小川徹太郎	「近世瀬戸内の出職漁師—能地・二窓東組の「人別帳」から」網野善彦他編『列島の文化史』6

144	1989	11	村上孝治	「地域学習の教材化—安芸国佐江崎村能地浦「浮鯛抄」」(兵庫教育大学社会系教科教育学会研究報告)村上孝治
145	1990	3	友野幸人	「家船の港」『尾道文化』8
146	1990	1	谷川健一編	『日本民俗文化資料集成4 海女と海士』三一書房
147	1990	11	大川春好(発刊責任)	『忠海歴史年表』忠海町郷土史研究会
148	1990	12	伊藤彰	「鐘崎と海士文化」『海と列島文化3 玄界灘の島々』小学館
149	1991	3	小川徹太郎	「漁する老漁師たち—シオをつくる」ことをめぐって」『海と列島文化9 瀬戸内の海人文化』小学館
150	1991	5	河野通博	『光と影の庶民史—瀬戸内に生きた人々』古今書院
151	1992	4	伊藤亜人	「中国と日本の漂海漁民」『海と列島文化4 東シナ海と西南文化』小学館
152	1992	5	谷川健一編	『日本民俗文化資料集成3 漂海民一家船と糸満』三一書房
153	1993	11	小川徹太郎	「(ハソキ)について—漁業集団史研究のための覚え書」『国立歴史民俗博物館研究報告』51
154	1994	2	山折哲雄・宮田登編	『日本歴史民俗論集8 漂泊の民俗文化』吉川弘文館
155	1994	12	可児弘明	「家船」に関する文献目録稿『国府台』5
156	1995	4	中村昭夫(写真)・可児弘明(文)	『ビジュアルブック水辺の生活誌 船に住む漁民たち』岩波書店
157	1995	8	小川徹太郎	「浮鯛抄」物語」網野善彦他編『中世の風景を読む6 内海を躍動する海の民』新人物往来社
158	1996	6	金柄徹	「船世帯民再考—家船民の陸地との交渉の分析を中心に」『民族学研究』61-6
159	1997	4	小川徹太郎	「能地漁民」『地方史事典』弘文堂
160	1997	10	森浩一他編著	『瀬戸内の海人たち—交流がはぐくんだ歴史と文化』中国新聞社
161	1997	11	飯田米秋・太田雅慶 監修	『目で見る東広島・竹原の100年』郷土出版社
162	1997		金柄徹	「倭寇と「以船為家」」『超域文化科学紀要』2
163	1998	7	沖浦和光	『瀬戸内の民俗誌—海民史の深層をたずねて』岩波書店(岩波新書)
164	1998	10	安野眞幸	「長崎開港史—家船の陸上がりの視点から」『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』39
165	1998	11	尾道学寮物語刊行委員会	『尾道・吉和漁港 家船の子どものたちの記録 尾道学寮物語』家族社
166	1999	11	中村茂樹・畔柳昭雄・石田卓矢	『アジアの水辺空間—くらし・集落・住居・文化』鹿島出版会
167	1999 2000	10 4	小川徹太郎	「家船」「しゃあ」「能地」「漂泊漁民」『日本民俗大辞典』(全2巻)吉川弘文館
168	2000	1	沖浦和光・谷川健一	「瀬戸内海に生きた漁民たち」『自然と文化』62
169	2000	1	森本孝	「家船漁師の思い出」『自然と文化』62

170	2000	2	金柄徹	「帝国主義と漁民の移動—広島県豊島漁民の「朝鮮海」出漁に関する歴史人類学的考察(1)」『亜細亜大学国際関係紀要』9-1-2
171	2000	10	金柄徹	「帝国主義と漁民の移動—広島県豊島漁民の「朝鮮海」出漁に関する歴史人類学的考察(2)」『亜細亜大学国際関係紀要』10-1
172	2000	12	胡桃沢勘司	『西日本庶民交易史の研究』文献出版
173	2000		金柄徹	「漁民の身体技法—伝統的「わざ」と先端テクノロジーの併用」『民族学研究』65-2
174	2001	5	芥川和夫	『瀬戸内の風土』文芸社
175	2001	7	土井作治監修・蔵橋純海夫他編	『図説 尾道・三原・因島の歴史』郷土出版社
176	2001	9	宮本常一	『女の民俗誌』岩波書店(岩波現代文庫)
177	2001	9	山口徹編	『街道の日本史 42 瀬戸内諸島と海の道』吉川弘文館
178	2001	11	巻幡徳志	『箱崎と家船』土生町文化財協会
179	2001	12	金柄徹	「近代国家と漁民」『亜細亜大学国際関係紀要』11-1
180	2001		金柄徹	「近代的家船」の出現に関する歴史人類学的考察(1)」『アジア研究所紀要』28
181	2002	2	五木寛之	『日本人のこころ 4』講談社
182	2002	11	金柄徹	「海に生きる人々—豊島の「家船」」赤坂憲雄他編『いくつもの日本 IV さまざまな生業』岩波書店
183	2003	2	浅川滋男	「東アジア漂流海民と家船居住」『鳥取環境大学紀要』創刊号
184	2003	4	金柄徹	「家船の民俗誌—船に住む豊島の漁民」『東北学〔第I期〕』8
185	2003	5	水野真知子	「水上生活者の子どもと地域の学校」千葉昌弘・梅村佳代編『地域の教育の歴史』川島書房
186	2003	7	金柄徹	『家船の民族誌—現代日本に生きる海の民』東京大学出版会
187	2004	3	石井昭示	『水上学校の昭和史—船で暮らす子どもたち』隅田川文庫
188	2004	11	川口祐二	『光る海、渚の暮らし』ドメス出版
189	2005	9	文化庁文化財部記念物課	「吉和港」「豊島の家船」『日本の文化的景観』同成社
190	2006	3	三原市役所	『三原市史 2 通史編2』三原市役所
191	2006	7	小川徹太郎	『越境と抵抗—海のフィールドワーク再考』新評論
192	2006	8	頼祺一編	『街道の日本史 41 広島・福山と山陽道』吉川弘文館
193	2006	11	森本孝	『舟と港のある風景—日本の漁村・あるくみるきく』農山漁村文化協会
194	2007	3	久保井規夫	『図説 食肉・狩猟の文化史—殺生禁断から命を生かす文化へ』柘植書房新社
195	2007	3	谷川健一	『甦る海上の道・日本と琉球』文藝春秋(文春新書)

196	2007		金柄徹	「アジアの家船に関する比較研究(その1)」『アジア研究所紀要』34
197	2008	1	越智信也	「史料としての伝承絵巻—「浮鯛抄」から「浮鯛系図」へ」『歴史と民俗』24
198	2008	3	八幡浩二	「『尾道漁村記』考—近世海民の歴史伝承」『尾道大学芸術文化学部紀要』7
199	2009	1	川島秀一	「『浮鯛抄』をめぐる文字と口頭の伝承」笹原亮二編『口頭伝承と文字文化—文字の民俗学 声の歴史学』思文閣出版
200	2010	9	斎藤潤	『島—瀬戸内海をあるく 第2集 2003-2006』みずのわ出版
201	2010	12	藤原美樹・樽谷昭彦	「『家船』の生活様式と形成の伝承について(1)」『福山大学工学部紀要』34
202	2011	9	金柄徹	「現代に生きる海の民—広島県豊島の家船」『歴博』168
203	2011	8	谷川健一	「九州西海岸を南北に貫く文化」(1992年10月講演)『谷川健一全集 15』富山房インターナショナル
204	2011	12	安野眞幸	『世界史の中の長崎開港』言視舎
205	2012	2	郷土と南山先生を語る会	『広島県無形民俗文化財 幸崎町春祭りの歴史』郷土と南山先生を語る会(南山資料館)
206	2012	5	厚香苗	「『家船の村』の民俗学的研究—陸地に定住した能地漁民の現在」『第6回 瀬戸内海文化研究・活動支援助成報告書(平成23年度)』福武学術文化振興財団
207	2012	5	藤原美樹	「『家船』にみえる生活様式と形成の伝承について—瀬戸内海沿岸を中心として」『第6回 瀬戸内海文化研究・活動支援助成報告書(平成23年度)』福武学術文化振興財団
208	2013	3	豊浜町史・呉市史両編さん委員会	『豊浜町史 資料編』呉市役所
209	2013	9	原田三代治	コラム「豊浜の漁業と家船」千田武志監修『保存版ふるさと呉』郷土出版社
210	2014	2	藤原美樹・樽谷昭彦	「尾道吉和家船の陸上がりによる漁民住宅の形成に関する研究」『福山大学工学部紀要』37
211	2014	9	印南敏秀	「鮎本虎夫の民俗調査資料紹介—能地の浮鯛調査と環境汚染」『瀬戸内海』68
212	2015	3	厚香苗・藤原美樹・藤川美代子	「水上生活者の子どものために設置された児童福祉施設の研究—「住むための船」から「学ぶための寮」へ移った子どもの視点から」『住総研 研究論文集』41(2014年版)
213	2015	3	厚香苗	「『船乗りの村』の戦後—大分県臼杵市諏訪津留の場合」鈴木正崇編『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相』風響社

※ 「家船」に関する論文、著作、調査報告書の他、資・史料、写真、エッセイ、辞典の解説等、幅広く記載した(ただし、新聞記事は除く)。また、沖繩の糸満漁民、アジア各地の船上生活漁民に関する邦文文献については、「家船」に言及しているものに限った。

※ 書籍・雑誌の巻号、輯等の別は省略し、数字のみを記載した(例:第5巻第1号→5-1)。